別 紙 2

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

論文提出者氏名　金　敬　姫

このたび提出された博士学位請求論文『『大日本国法華経験記』の成立と特質』の審査は、平成13年3月16日午後3時より14号館706室で、三谷博教授(地域)・三角洋一教授(地域)・黒住真教授(地域)・松岡心平助教授(超域)・義江彰夫教授(地域・主査)、以上5人の審査員全員出席のもとで行われた。査読に基づく審査を通して以下のことが確認された。

従来『大日本国法華経験記』編纂の意図についての研究は、日本文学・日本史学いずれの側からも本格的には行われていない。金氏は、同書成立の環境と同書構成上の特徴を具体的に分析することを通して、この問題を全面的に解明しようとした。すなわち「第一章　鎮源とその周辺」では、同書編者鎮源とは、横川で源信の弟子として法華経を軸に、阿弥陀浄土信仰を取り込もうとする修学に励んでいた人であったことを初めて明らかにする。「第二章　法華験記における末法意識」からは、同書の内的分析に入り、まず同書諸説話に末法思想が見られ、かつ法華経の霊験がそれを克服するものとして強調されていることを明示する。「第三章　『法華源記』における持経者像と反世俗化の思想」では、同書における持経者はひじりと同義であり反俗的性格を帯び、また横川の歴代僧侶にかんしては反世俗性の強い者中心に扱われていることが、初めて究明される。「第四章　『法華験記』にとりこまれる往生思想」では、同書の配列が往生伝と同じ仏弟子順であることに着目し、同書が法華経の立場から極楽往生思想を全面的に吸収しようとする意図によって編纂されたことを、鮮やかに論証している。「第五章　末法意識の中での法華思想の再編成」は、上述四章を踏まえて、同書が、全体として末法意識の強まっていく独特な時代のなかで、往生願望を取り込みつつ、逆に法華経によって末法を乗り越えようとする強靭な鎮源の意思と念願の所産であることを包括的に解き明かしている。

以上で明らかなように、本論文は、編者の置かれた位置・時代と作品の構造分析とを徹底的に行うことによって、『法華験記』の構成・内実・編纂意図を研究史上、初めて全面的に明らかにし、またそのことを通して、この時代の仏教信仰にかんし、極楽浄土信仰ばかりを強調する従来の研究の偏りを是正し、その対極にそれを取り込みながら、法華経信仰によって現実を生き抜こうとした大きな流れがあったことを見出した意義は限りなく深い。本論文の成果に立って前後の時代を見直すならば、平安初期いらいの法華経・密教・顕教・浄土教の複合的関係や平安末期以降の浄土宗・浄土真宗・禅宗・法華宗・南都顕密諸宗の構造的関係などにも、新しい視野が開けてくるであろう。

もちろん、本論文にも問題点はある。「第三章」で反俗性を強調するあまり、道命などやや異なる者の扱いが棚上げになったり、議論が些か単調に流れるところも無いとは言えない。史料引用にも僅かながら誤りがある。しかし、これらの問題は、本論文の上記の評価を覆すものではなく、今後の研究のなかで発展的に解決されうる事柄である。よって、慎重審議の結果、三谷・三角・黒住・松岡・義江の五審査員は、全員一致で、金敬姫『『大日本法華経験』の成立と特質』を博士(学術)を受けるに十分相応しい論文である、との結論に到達した。